平成24年度春季展

加賀藩と北越戦争

「加賀藩北越軍事輯録」⑩（16.51−95）

平成24年 4月17日（火）～6月17日（日）

金沢市立玉川図書館 **近世史料館**

はじめに

慶応4年（1868）正月3日に発生した鳥羽･伏見の戦い以降、箱館戦争に至るまでの約1年にわたって新政府と旧幕府勢力が戦った戊辰戦争では、加賀藩も官軍として庄内や会津若松まで転戦しており、特に柏崎方面や長岡では桑名藩や長岡藩を相手に激しい戦闘を繰り広げました。

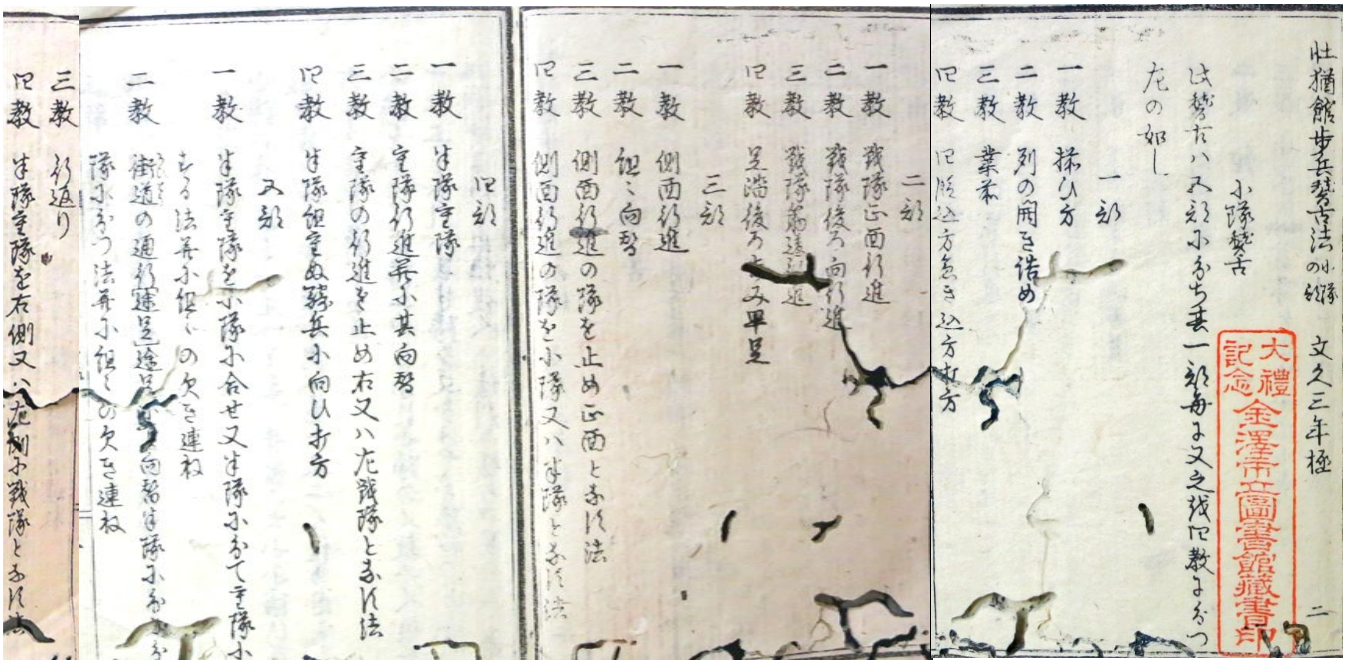
本展示では、特に北越戦争と呼ばれるこれらの戦闘に関する従軍日記や戦場絵図、報告書などの史料を展示することにより、加賀藩が北越戦争においてどのような動きをみせたのかについて紹介します。

【幕末の軍制改革】

当時の藩主前田斉泰は、嘉永6年（1853）に能登を巡見するなど海防意識は高く、壮猶館の設置に加え、江戸下屋敷での大砲製造や軍艦の購入、割場附小者への歩兵筒訓練を命令するなど、西洋兵器の導入には積極的であった一方で、西洋式軍制の採用は藩内身分秩序にも影響を及ぼすものであったために慎重でした。そのため、文久3年（1863）には軍制の採用を巡って海防方御用主附の年寄らと対立し、当時の攘夷機運と相まって藩内は混乱しました。

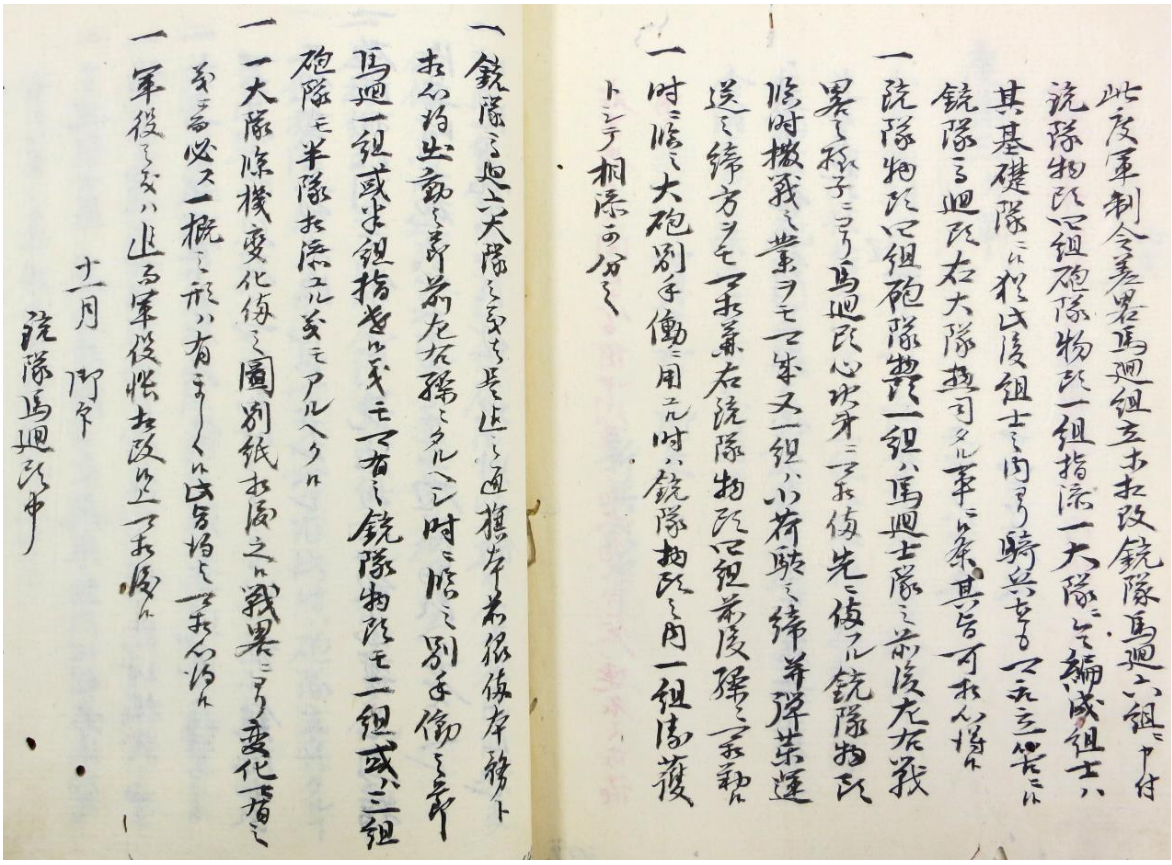
しかし、元治元年（1864）に禁門の変が発生して国内が内乱の様相を呈すると、加賀藩においても藩直属の軍事力強化が求められ、斉泰は大砲隊の設置や、割場附の者達による本格的な銃隊訓練に着手しました。そして、慶応2年（1866）4月に世嗣前田慶寧が家督を相続しますが、当時は第2次長州征討直前であり、もはや抜本的な軍制改革は避けられない状況でした。慶寧は斉泰期の政策を尊重しつつ西洋式軍制の導入を推進し、同3年秋には銃隊馬廻頭を惣司とする一大隊（銃隊馬廻1組、銃隊物頭4組、砲隊物頭1組）を編制し計6大隊の体制で、加賀藩における西洋式部隊が整備されました。

・壮猶館歩兵稽古法（090-793）



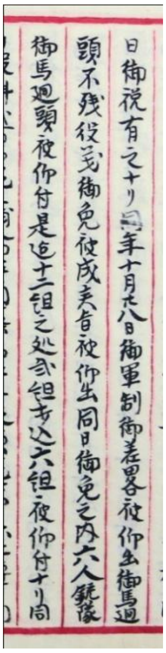
壮猶館における歩兵訓練規則。文久3年成立で全6冊。生兵・小隊・大隊（2冊）・諸陣・散兵の部と分かれ、詳細な規則が記されている。小隊稽古においては大きく5部に分け、各部をさらに4教に分類していたことがわかるが、これらの稽古は壮猶館や三州各地の銃卒稽古で実践されていたと考えられる。しかし、当時は藩主前田斉泰が身分制の観点から士身分の足並稽古については認めなかったため、推進する立場の家臣達と一時期対立することとなった。

・御親翰留（16.25-28）



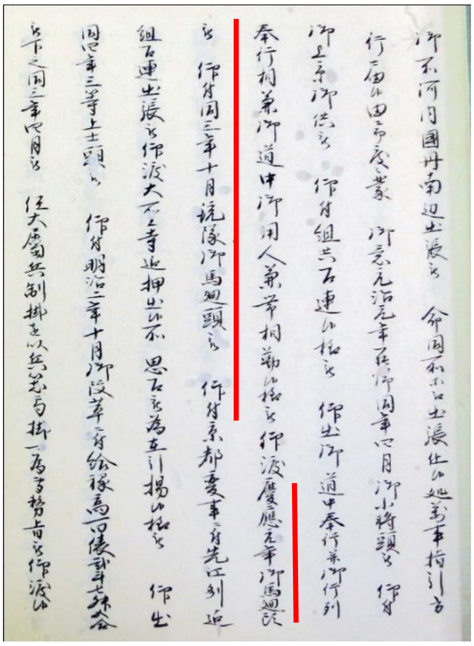
慶応3年（1867）11月に出された藩主前田慶寧の親翰。軍制改革により創設された銃隊馬廻1組、銃隊物頭4組、砲隊物頭1組によって一大隊を編成することが述べられており、各組の配置や臨時で砲隊を動員する場合の取り決めなどがわかる。

・見聞袋群斗記草稿（16.11-52②）



慶応3年10月28日に軍制改革によって馬廻頭12名全員が役義御免となり、そのうち6名が新設の銃隊馬廻頭に任じられたこと、従来の馬廻組12組が銃隊馬廻組6組になったことがわかる。

・奥村甚三郎由緒書　先祖由緒并一類附帳（16.31-65）



奥村甚三郎は、250石の平士。元治元年（1864）に小将頭となり、翌慶応元年には馬廻頭となる。そして、慶応3年の軍制改革よって馬廻頭が免除となると銃隊馬廻頭に任じられている。

・熕砲系表　西洋砲術ニ付御尋之趣申上條条々并系表（095.26-55③）

・弾子系表　西洋砲術ニ付御尋之趣申上條条々并系表（095.26-55④）

・北越戦争軍事御届書（16.51-85）

当時加賀藩が所有していた軍艦が整理されている。購入日や購入先、購入場所といった情報や、動力、サイズといった各艦の性能が記されている。

【北越戦争の展開】

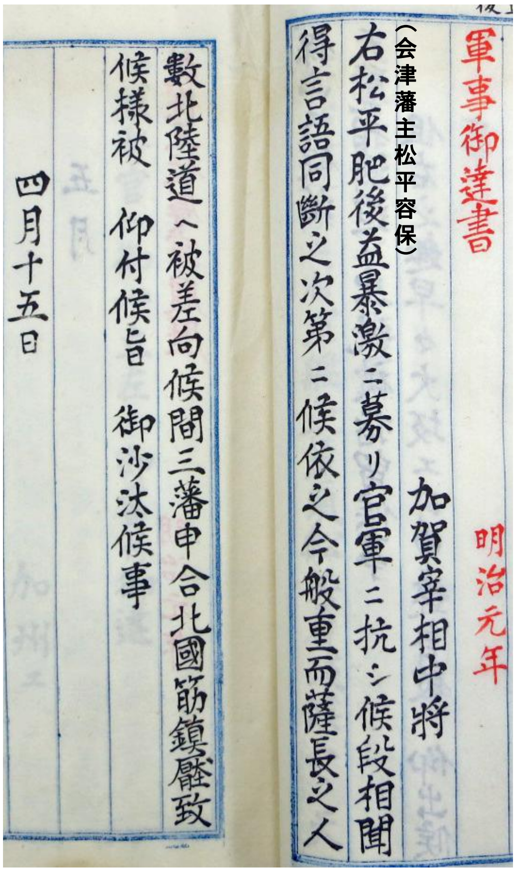
新政府は鳥羽･伏見の戦い後の慶応4年正月7日に徳川慶喜討伐令を出し、9日には公家の高倉永祜を北陸道鎮撫総督に任命して北陸諸藩の制圧に向かわせました。加賀藩は慶喜討伐令をはじめとする諸通達に対する請書を提出し、前藩主前田斉泰が上洛するなど恭順の姿勢を示しました。

そして4月15日、越後筋の情勢が不穏であるとして加賀藩にも官軍動員の命令が下りると、藩は当時在京していた藩士小川仙之助・簑輪知大夫の両名に対して出兵を命じ、彼らは金沢に戻って自身の部隊を編制して越後に向かうことになります。一方、金沢では浮浪の徒が領内へ侵入するのを防ぐために銃隊馬廻頭の斎藤与兵衛を惣司とする一大隊を越中境まで派兵していました。その後高田藩から有事の際の救援を依頼されたため態勢を整えていたところ、閏4月8日越中境に滞在中の一大隊を官軍として動員することが通達され、斎藤ら一大隊は小川・簑輪両隊に先駆けて越後へ進軍し、鯨波の戦などに参加していきました。

しかし、この一大隊は加賀藩の軍制による単位であり、新政府軍の参謀の意向によって大隊は分散･解体させられて動員されたことから、藩主慶寧は彼らを随時帰藩させ、あらたに銃隊長（割場隊長）を派兵することを伝えました。ただし、実際は交替は円滑にいかず、銃隊物頭や銃隊長が入り交じった状態で柏崎や長岡で激戦を繰り広げ、小川隊は長州藩の報国隊、薩摩藩の三番徴兵隊とともに「抜群強兵」と褒め称えられました。また、7月29日の長岡城再攻撃では、家老津田玄蕃隊が城内に一番乗りして制圧するなど、被害を出しつつも功績をあげていきました。

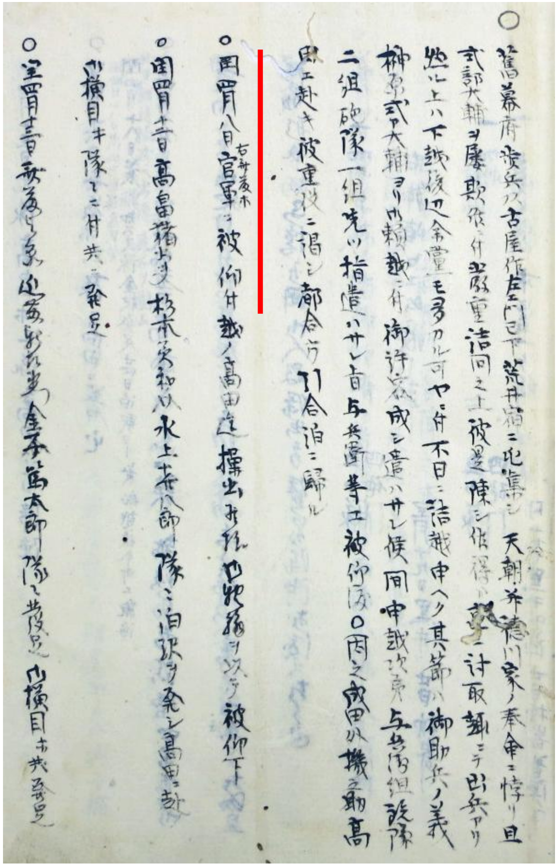
7月の長岡城攻め以降は、加賀藩の部隊は主に後方支援や戍兵（守備兵）として活動して占領した城の警備や会津降伏人の護送の任に就き、最終的には翌2年3月で全ての部隊が帰藩しました。

・加賀藩北越軍事輯録（16.51-95①）


軍事御達書
明治元年
加賀宰相中将
（会津藩主松平容保）
右松平肥後益暴激ニ募リ官軍ニ抗シ候段相聞
得言語同断之次第ニ候依之今般薩長之人
数北陸道へ被差向候間三藩申合北國筋鎮壓致
候様被　仰付候旨　御沙汰候事
四月十五日

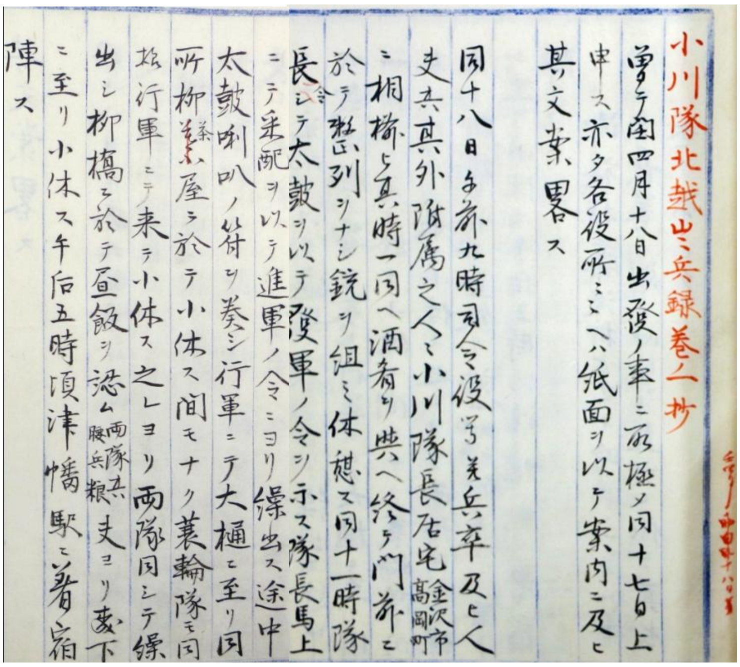
4月15日、会津藩が新政府に抵抗していることを理由に、薩摩･長州と協力して北国筋を鎮圧するよう京都において命じられている。この命令により加賀藩は官軍となり、京都では銃隊物頭小川仙之助・簑輪知大夫に出兵命令が出されている。

・越後出兵書類抜萃（16.51-101①）



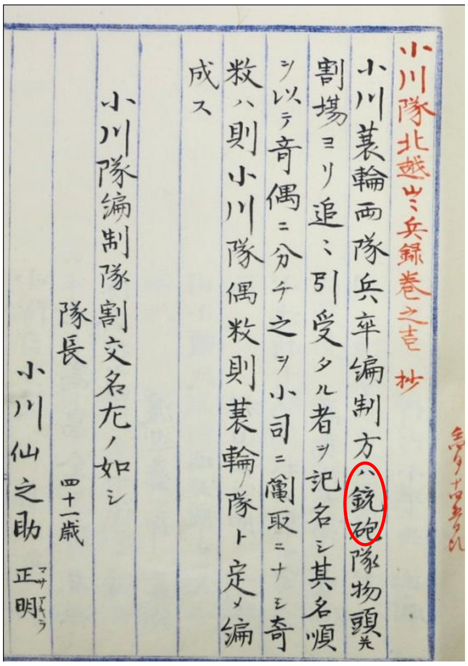
越後筋が不穏であるとして加賀藩は銃隊馬廻頭斎藤与兵衛ら一大隊を4月24日に越中境まで出張させており、その後高田藩から有事の際の救援を依頼されたために準備していたところ、閏4月8日には斎藤ら越中境に滞在していた加賀藩の一大隊を官軍として動員することが通達され、同12・13日に越後に向けて出発している。

・北越出師書類抄録（16.51-102①）



小川隊北越出兵録巻之一抄
曽テ閏四月十八日出發ノ事ニ取極メ同十七日上
申ス亦タ各役所ミヘハ紙面ヲ以テ案内ニ及ヒ
其文案略ス
同十八日午前九時司令役等并兵卒及ヒ人
足兵其外附属之人ミ小川隊長居宅金沢市高岡町
ニ相揃ヒ兵時一同ヘ酒肴ヲ供ヘ終テ門前ニ
於テ整列シナシ銃ヲ組ミ休憩ス同十一時隊
長令ニテ太鼓ヲ以テ發軍ノ令ヲ示ス隊長馬上
ニテ采配ヲ以テ進軍ノ令ニヨリ繰出ス途中
太鼓喇叭ノ符ヲ奏シ行軍ニテ大樋ニ至リ同
所柳茶屋ニ於テ小休ス間モナク蓑輪隊モ同
様行軍ニテ来テ小休ス之レヨリ両隊同ミテ繰
出シ柳橋ニ於テ昼飯ヲ認ム両隊兵腰兵粮夫ヨリ
ニ至リ小休ス午后五時頃津幡駅ニ着宿
陣ス

小川隊出陣の様子



小川隊北越出兵録巻之壱抄
小川蓑輪両隊兵卒編制方ハ銃砲隊物頭并
割場ヨリ追ミ引受タル者ヲ記名シ其名順
ヲ以テ奇偶ニ分チ之ヲ小司ニ鬮取ニナシ奇
数ハ則小川隊偶数則蓑輪隊ト定メ編
成ス
小川隊編制隊割交名左ノ如シ
隊長
四十一歳
小川仙之助 正明（マサアキラ）

小川隊・蓑輪隊編制

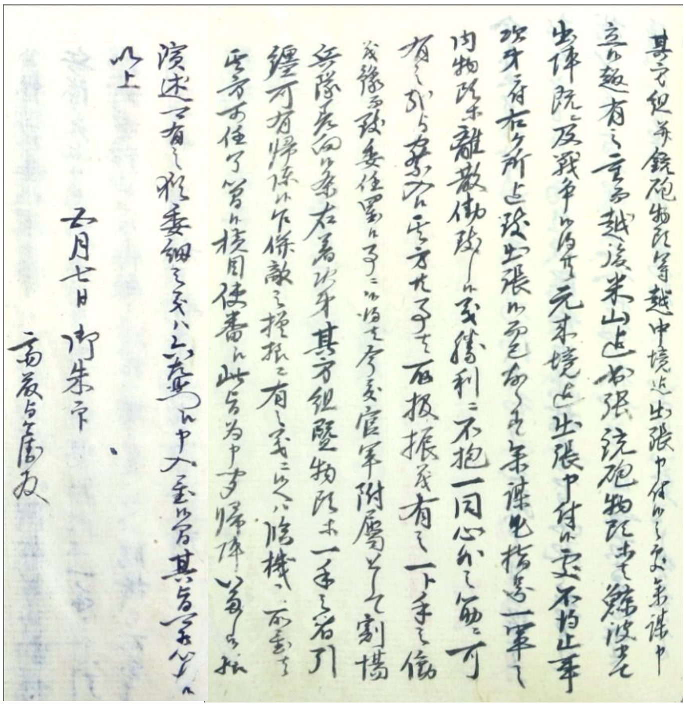
京都において出兵を命じられた小川仙之助、簑輪知大夫の両名は、京都では兵卒が集まらなかったため、金沢に戻って銃･砲隊物頭の各組および割場附の者達の中から選抜して名簿を作成し、その上で鬮を引いて編制している（右）。出発当日は小川隊長宅に一同集合、酒肴を振る舞った上で整列し、馬上の小川が采配をふるい発令して進軍を開始している（上）。

・加賀藩北越軍事輯録（16.51-95⑩）

5月16日ヨリ官軍長岡城ヲ攻メ19日竟ヒニ之ヲ陥シイル本藩銃兵小川隊砲兵水上隊及ヒ薩長高田三藩兵戦地之図。

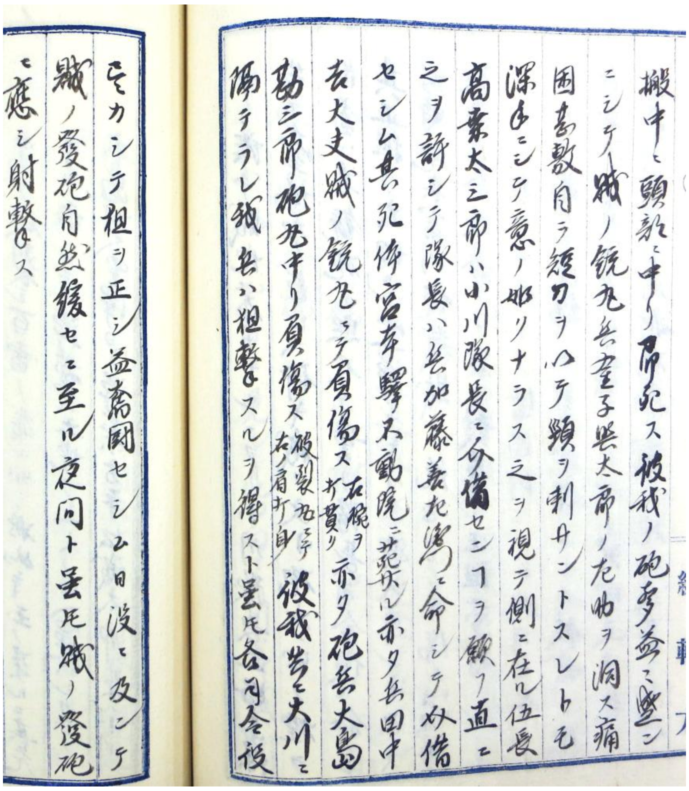
この戦闘により官軍は長岡城を制圧したが、7月25日の襲撃によって奪還されてしまい、29日に再び攻撃を仕掛けて長岡城を制圧している。

・御親翰留（16.25-28）



藩主前田慶寧から銃隊馬廻頭斎藤与兵衛に出された親翰。本来は越中境までの出張であった斎藤らが参謀の命令により官軍として出兵したこと、現地では加賀藩の軍制である一大隊ではなく、分散・解体させられた上で動員されていることを挙げ、官軍附属を意識して編制した割場の部隊をあらたに派遣するので交替するようにと述べられている。

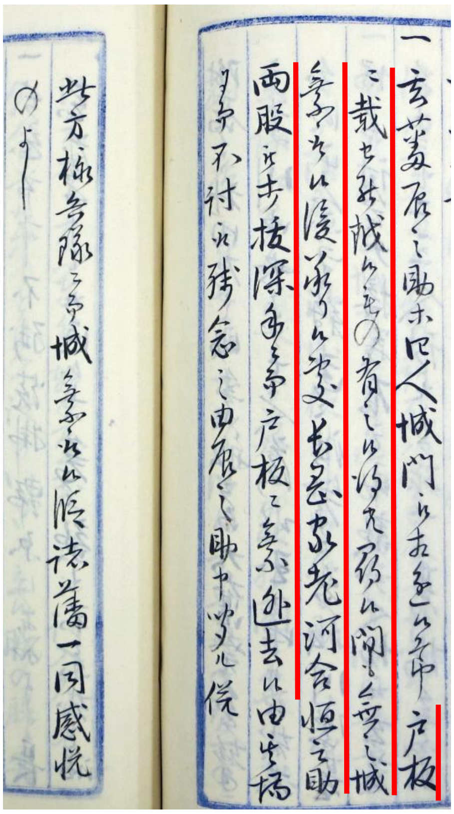
・北越出師書類抄録（16.51-102②）



搬中ニ頭顱ニ中リ即死ス彼我ノ砲声益ニ盛ニ
ニシテ賊ノ銃丸兵士子呉太郎ノ左肋ヲ洞ス痛
困甚敷自ラ短刀ヲ以テ頸ヲ刺サントスレトモ
深手ニシテ意ノ如クナラス之ヲ視テ側ニ在ル伍長
高崇太三郎ハ小川隊長ニ介備センコトヲ願フ直ニ
之ヲ許シテ隊長ハ兵加藤善九郎ニ命シテ介備
セシム兵死体宮本駿不動既ニ葬ル赤夕兵田中
吉太夫賊ノ銃丸ニテ負傷ス右腕ヲ赤夕砲兵大島
勘三郎砲丸ニ中リ負傷ス破裂丸ニテ右ノ肩打身彼我共ニ大川ニ
隔テラレ賊兵ハ狙撃スルヲ得スト雖モ各司令役
モ力シテ狙ヲ正シ益奮闘セシム日没ニ及ンテ
賊ノ発砲自然緩セニ至ル迄同ト雖モ賊ノ発砲
ニ応シ射撃ス

小川隊は前線に配置されたこともあって激しい戦闘に参加している。5月16日越後国大島村の戦闘においては配下の兵が次々と敵の弾丸によって負傷するなかで、各司令役が尽力して奮闘したことが記されている。

・北越出師書類抄録（16.51-102④）



7月29日の長岡城再攻撃では、加賀藩家老の津田玄蕃が川を渡り横撃することを参謀に進言して許可され、津田玄蕃隊は信濃川を渡って川際の台場で激しい銃撃戦を行っている。その後城内に押し入り一番乗りで城を制圧することに成功したが、その際戸板に乗せられて退却する人物を見かけており、その人物が長岡藩家老の河井継之助だったことが判明して悔しがったことが記されている。

・小川仙之助隊戦場之図（16.51-117④）

6月19日に山田村を海陸双方から攻撃した際の絵図。長州藩の軍艦が描かれている。

- **軍事御達書（16.51-84①）**
- **越後筋風説書（16.51-92）**
- **加賀藩北越軍事輯録（16.51-95④・⑧・⑪・23）**
- **小川隊北越出兵軍人交名表并戦闘図（16.51-116）**
- **北越出兵諸調理并記録（16.51-124④）**
- **北越出兵諸調理并記録（16.51-124⑦）**
- **北越出師書類抄録（16.51-102③）**

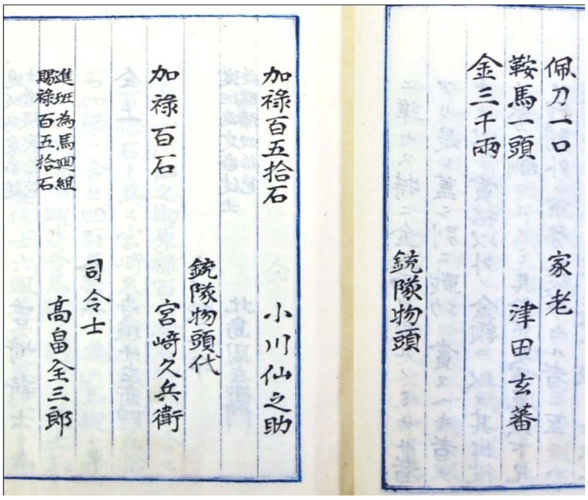
【戦争後の加賀藩】

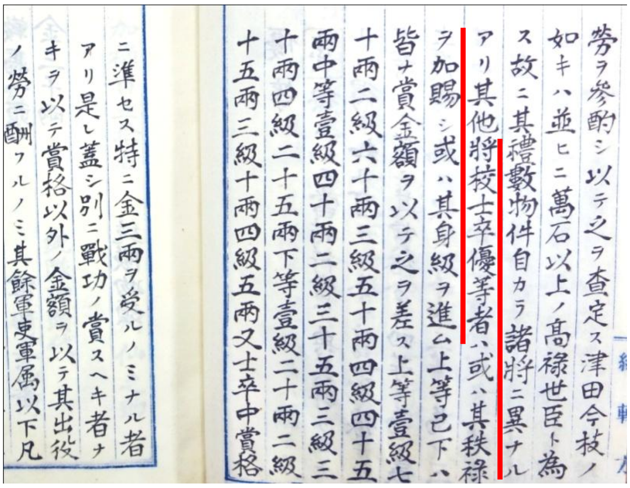
明治元年秋以降、北越戦争に動員されていた部隊が随時帰藩しますが、動員された加賀藩兵は7,000人を超え、この戦争における死傷者も280人にのぼるなど、加賀藩にとって大きな戦争となりました。

戦後には新政府の評価基準を踏まえた戦功書を新政府へ提出するとともに、藩内においても賞功慰労がおこなわれました。功績があった者を功績に応じて13段階で評価し、該当者は1,400人を超え、褒賞の総額も22,000両を超えるなど、明治初年の藩財政にも影響を与えました。

また、明治元年12月には卯辰山において戦死した者達の招魂祭が執行され、戦死者の親族に対しては供物が下賜されました。

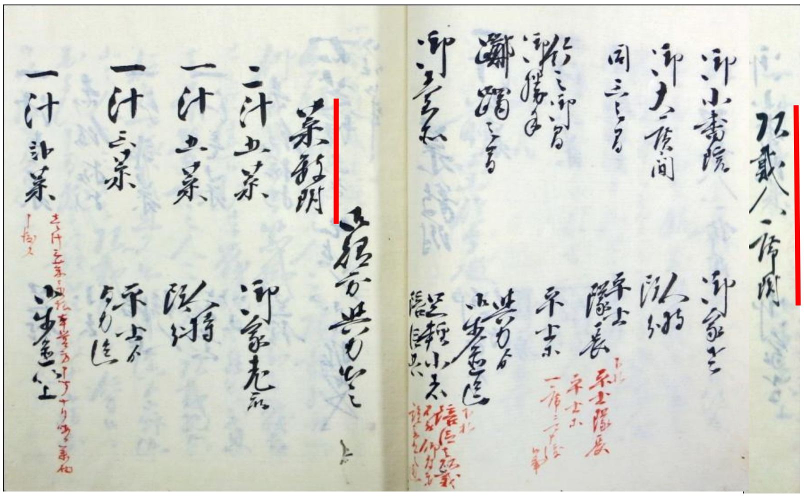
・加賀藩北越軍事輯録（16. 51-95⑤）

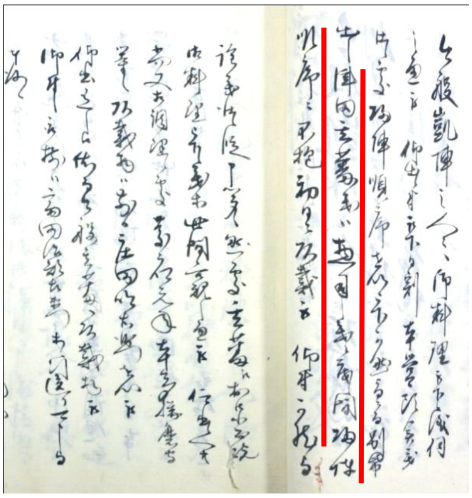

佩刀一口
鞍馬一頭
金三千両
家老　津田玄蕃
銃隊物頭
加禄百五拾石　小川仙之助
加禄百石　銃隊物頭代　宮崎久兵衛
進班為馬廻組　賜禄百五拾石　司令士　高畠全三郎


勞ヲ參酌シ以テ之ヲ査定ス津田令技ノ
如キハ並ヒニ萬石以上ノ高禄世臣ト為
ス故ニ其禮數物件自カラ諸將ニ異ナル
アリ其他將校士卒優等者ハ或ハ其秩禄
ヲ加賜シ或ハ其身級ヲ進ム上等已下ハ
皆ナ賞金額ヲ以テ之ヲ差ス上等壹級七
十兩二級六十兩三級五十兩四級四十五
兩中等壹級四十兩二級三十五兩三級三
十兩四級二十五兩下等壹級二十兩二級
十五兩三級十兩四級五兩又士卒中賞格
ニ準セス特ニ金三兩ヲ受ルノミナル者
アリ是レ蓋シ別ニ戰功ノ賞スヘキ者ナ
キヲ以テ賞格以外ノ金額ヲ以テ其出役
ノ勞ニ酬フルノミ其餘軍吏軍屬以下凡

戦争後、加賀藩では各隊長が提出した戦功書や横目の報告書を元に賞功慰労が行われている。功績に応じて優等・上等・中等・下等の4段階があり、さらに上等以下は1級から4級に分類されて計13等級で評価されている（右）。優等は禄高の加賜もしくは昇級されており、小川仙之助は150石加増、家督相続前であった高畠全三郎は新知150石を拝領して馬廻組に列している。

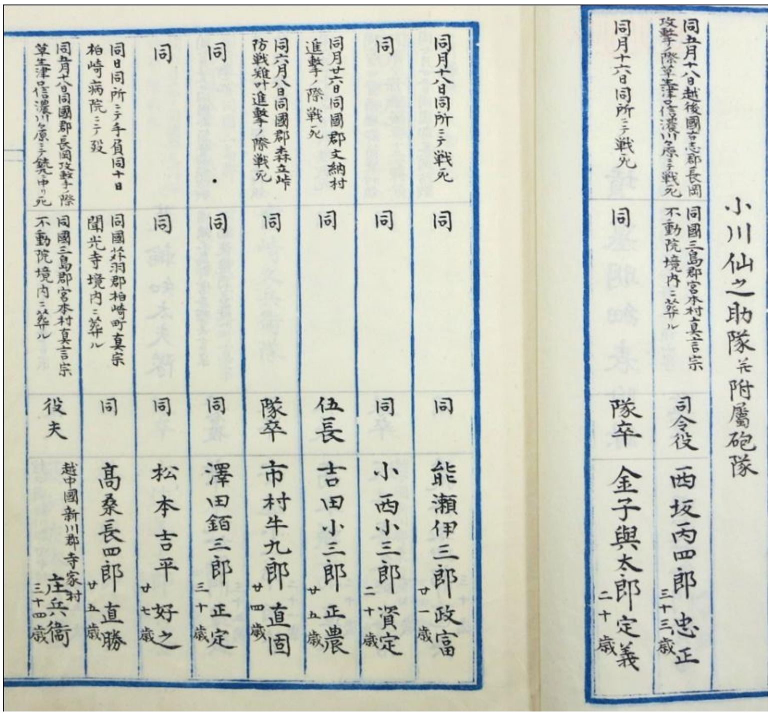
・越後より凱陣之面々へ御意等調一巻（16. 51-136）





北越戦争に参加した各隊が凱陣した際の料理や拝領物に関する取り決めがなされており、基本的には金沢に戻った順番となるが、家老津田玄蕃については惣司のため初日に頂戴することが決まっている。本史料では、頂戴人の控えの間や菜数などが身分に応じて決められていることがわかる。

・**北越之役戦死者墳墓明細表**（16.51-143）



小川仙之助隊并附屬砲隊

同五月十八日越後國古志郡長岡攻撃ノ際草生津信濃川ヶ原ニテ戦死	同國三島郡宮本村真言宗不動院境内ニ葬ル	司令役	西坂丙四郎忠正 三十三歳
同月十六日同所ニテ戦死	同	隊卒	金子與太郎定義 二十歳
同月十八日同所ニテ戦死	同	同	能瀬伊三郎政富 廿一歳
同	同	同	小西小三郎資定 二十歳
同月廿六日同國郡丈納村進撃ノ際戦死	同	伍長	吉田小三郎正農 廿五歳
同六月八日同國郡森立峠防戦難叶進撃ノ際戦死	同	隊卒	市村牛九郎直固 廿四歳
同	同	同	澤田銆三郎正定 三十歳
同	同	同	松本吉平好之 廿七歳
同日同所ニテ手負同十日柏崎病院ニテ歿	同國苅羽郡柏崎町真宗閻光寺境内ニ葬ル	同	高桑長四郎直勝 廿五歳
同廿八日同國郡長岡攻撃ノ際草生津信濃川ヶ原ニテ銃ニ中リ死	同國三島郡宮本村真言宗不動院境内ニ葬ル	役夫	越中國新川郡寺家村 庄兵衛 三十四歳

北越戦争において加賀藩は280人以上の戦死者を出したが、戦死した者達について所属していた隊毎に戦死の模様や埋葬された場所、隊における地位、氏名の順に整理されている。

・**北越戦死者墳墓箇所絵図**（16.51-145）

北越戦争において戦死した者達が埋葬された地を描いたもの。越後国頸城郡笠島村真言宗多聞寺、越後国苅羽郡柏崎日蓮宗妙行寺など、18ヶ所の絵が描かれている。

・**小川隊北越出兵録**（16.51-130③）

明治元年（1868）12月2日に卯辰山において北越戦争で戦死した者達の招魂祭が執行され、戦死者の親族に対しては供物が下賜されることになり、貴賤の別なく出席するようにと記されている。

・**奥羽越出陣之人々賞罰之しらべ一件**（16.51-142）

・**陣中銘心録**（16.51-146）

元小川隊の後藤又吉が、子孫に北越戦争を伝えようと書き記した回顧録。明治14年（1881）成立。

掲載史料と展示史料は一致しないことがあります。